

# 宮本 輝「夢見通りの人々」論―物語の始まり―

藤 村 猛

## 要 旨

宮本輝の「夢見通りの人々」は、昭和59年9月から昭和60年11月まで、「小説新潮」に連載された、全十章の短編連作集である。作者も言うように、アメリカの作家・アンダソンの『ワインズバーグ・オハイオ』に影響を受けている。特に、『ワインズバーグ・オハイオ』の持つ「グロテスク」さの影響が、「夢見通りの人々」の前半に見られる。しかし、その後は宮本の言うように「グロテスク」さを離れ、「私流」になっていく。

本稿では、「夢見通りの人々」の一章および二章に注目して、主人公格の里見春太の詩人や恋愛への思いとともに、彼の紹介する人々の特異さ、そして、老婆・トミとの関わりを通して、春太の内面の優しさを明らかにして、〈夢見通り〉の世界の始まりを考える。

## キーワード

グロテスク・優柔不断・詩人・恋愛・優しさ

## 一 はじめに

「夢見通りの人々」は、昭和57年9月の「小説新潮」に第三章の「時計屋の息子」が掲載され、断続的に昭和60年11月まで連載された、十章（10作）の短編による連作集である。<sup>(1)</sup>その後、昭和61年3月に新潮社より刊行された。

各章の主な登場人物は、次の通りである。

第一章 夢見通り 里見春太（会社員・30歳） 田井菊次

郎（酒店の隠居）

ワンさん夫妻（広瀬・中華料理屋）・

娘の美鈴（中学一年生）

森雅久（カメラ店の若主人）

春太 トミ（煙草屋・77歳）

第二章 燕の巣 村田英介（時計店主） 息子の哲太郎

（17歳）

第三章 時計屋の息子

吉武権二（パチンコ屋） 娘の理恵  
（17歳）

第四章 肉の鏡 辰巳竜一 竜二 父親 明美（26歳）

第五章 十八回目の逃亡 春太 菊次郎 茂木（詐欺師）

第六章 宝宝箱の中 野口光子（理容師・21歳） 竜一

第七章 帰り道 春太 哲太郎 理恵

第八章 白い垢 奈津（スナツクの女主人・40歳）

信次（バーテンダー・二十代） げえや  
ん（客・板金工43歳）

第九章 波まくら 春太 光子 竜一

第十章 洞窟の火 春太 美鈴 森雅久

以上のように、作品全体に一貫して登場する人物はいないが、里見春太が登場する章が六章あることから、彼が中心人物と言えるかもしれない。春太の視点から、作品を簡単に言うと、一・二章で春太が登場し、彼と彼の周囲の人物（夢見通りの人々）が描かれ、三章以降、春太が登場したりしなかったりして、夢見通りの住民たちが語られ、最後の九・十章で再び、春太が重要な人物として登場し、作品は収束していく構造を取っている。

登場人物たちについて言うと、彼らは夢見通り商店街に住んでいる、店と客の関係―例えば、春太と中華料理屋の主人・ワンさん、スナック・シャレードと客たちなど―や、何らかの出来事で生じた関係―例えば、トミと春太（二章）、春太と茂木（五章）など―や、また、住民たちの恋愛関係―春太と光子、そして竜一、哲太郎と理恵、奈津とげいさんなど―が作中に描かれる。

前二者はともかく、三番目の恋愛関係について言うと、春太の好きな女性は隣に住む光子で、光子の好きな人は竜一である。だが、光子は竜一を恐れて、故郷（鳥取）に去って行く（九章）。また、時計店の村田哲太郎（高校2年生）は同級生の吉武理恵を妊娠させ、家の金を盗んで（三章）、二人で半年間東京などに逃げていたが、金も無くなり親の元に帰る。理恵は哲太郎に愛想をつかし、一人で子どもを育てることにする（七章）。シャレードのママ・菜津は、顔のアザから年下の愛人を作っていた（八章）が、客の「げいさん」のプロポーズを断り、店を閉める（十章）。いずれもハッピーエンドなものではない。

そして、作中の現在時間は、里見春太が二黒土星の生まれであることから、彼は昭和28年生まれと推測され、作中に現在30歳という記述があることから、昭和59年頃であろう。各章ごとに時間の整理をすると、大体、次のようになる。

一章 6月 二章 6月 五章 10月末 六章 11月末  
七章 12月 八章 1月末 九章 3月26日 十章 6月

つまり、この作品は、夢見通りでの一年間の出来事を描いていることになる。

## 二 夢見通りの住民たち―「グロテスク」と人間味―

作者・宮本の言（『宮本輝全集』「後記」）によれば、この小説は、

アメリカの小説家アンダーソンの『ワインズバーグ・オハイオ』―「架空の町を創り、一人の青年と、彼の周辺で生きる人々を描いて、陰影の濃い小説世界を築いてい」る―の影響を受けている。<sup>(2)</sup>

『ワインズバーグ・オハイオ』も、一人の主人公ではなく、町に住む様々な人々―都会や時代に取り残された人々―が描かれている。だが、宮本輝の言うように、「夢見通りの人々」は、「書き出してみると、夢見通りの住民たちは、いかんともしがたく、私流にならざるを得なかった」のである。それは主に、『ワインズバーグ・オハイオ』に描かれた「グロテスク」さ（人間離れた奇怪さ）―従来の宮本の作品には珍しいもの―との距離による。

「夢見通り商店街」に住んでいるのは、作品の一章で春太が思うように、夢見通りという「名称にそぐわない人間たち」<sup>(11)</sup><sup>(3)</sup>である。

春太は夢見通りの住民に対して、次のように思う。

春太は夢見通り商店街のネオンを見あげ、顔をしかめて頭を掻きむしった。よくもまあ、その名称にそぐわない人間たちばかりによって商店街が形成されていることだろうと、勤め先から帰って来るたびに思うのだった。

競馬狂いで夫婦ゲンカの耐えない太楼軒の親父。ライオンズクラブのメンバーになりたくて、PTAの会長、夢見通り商店会組合長、（中略）肩書をすべて名刺に刷り込んでいる夢見会館というパチンコ屋の経営者。金儲けが人生のすべてであるかのように、店に入って来た客に必ず何かを買わせずにはおかな

い村田時計店の、揃って一種偏執的な目つきをした夫婦。男色家だと噂されているカメラ屋の若い主人。美男のパーテンシカ雇わず、自分よりうんと歳下のその使用人をいつのまにかものにして、しかもそれが三カ月とつづかないスナック（シャレード）の女主人。もとやくざの組員だった肉屋の兄弟。教えあげればきりがないほど、夢見通りはそれらひと癖もふた癖もある人々で成り立っている。<sup>(11)</sup>

以上のように、彼らは一癖も二癖もある人物たちであり、彼らの中には、性格や相貌などに、「グロテスク」なものがある。だが、彼らは、作品が進むにつれて、内なる「人間」を見せていく。<sup>(4)</sup>安藤始氏の言うように、「『夢見通りの人々』に登場する人々は、善意が基調になっており」、「本質的には善の心を捨てることのできない小悪党的集団」であり、「まさにこの善なる人々に戻っていく物語」<sup>(5)</sup>であろう。

つまり作品が進行するにつれて、住民たちの内面が描かれ、俗悪さは残るものの、人間味が感じられるようになる。例えば、淫蕩で暴力的と住民たちから恐れられている、元やくざの竜一も、光子から入れ墨を取ってと言われ、春太に援助を乞い、彼の好意に対して、「里見はん、俺、一生、あなたの友だちや」<sup>(208)</sup>と感謝し、涙を流す。このように、春太や竜一の善良さも分かっている。それらが、「グロテスク」ではない、宮本の言う「私流」のものであろう。

本稿では、全体の進行役である春太が如何なる人物かを、作品の一章と二章から見えていき、「夢見通りの人々」という物語の始まりを考

三 「夢見通り」―里見春太の登場―

一章は連作の始まりを告げるにふさわしく、里見春太が自分と隣人たちを紹介していく。

里見春太は、通信教育関連の「進学通信社」に勤めていて、仕事は月に20人の加入者（小・中学生）を増やすことである。だが、「質の高い塾の出現と、同業他社による過当競争」（212）によって、それは困難事であった。そういう彼の望みは、詩集を出すことである。サラリーマンと詩集というミスマッチからも想像されるように、彼は純粋だが優柔不断な性格である。

一章は、彼が属している同人「蒼い島」の合評会（心齋橋の喫茶店）後の場面から始まる。彼は、夢見通り近くの地下鉄を降り、地上へと向かう階段口の間で、吹き飛んでいく新聞紙に対して、次のように思う。

この新聞紙を走らせているのは腐った街の風だ、吸ってはいけない、と里見春太は思い、息を止めた。夜更けの地下道を歩くたびに、彼は必ず何等かの理由で一度は息を止める。（9）

「腐った街の風だ」などの春太の感覚は、潔癖さや繊細さというよりも、彼の弱さを表しているように。このように、彼の弱さの紹介から作品は始まる。

続いて、地下鉄の駅から夢見通りに帰って来た彼は、前節で紹介

したように、あくの強い住民たちを嘆く。その後、酒屋の田井老人につかまり、強引に手相判断をされる。次に引用するのは、田井老人の「ご託」である。

あんさんは二黒土星。ことしは何をやってもあきまへんでエ

とくに胃腸に気をつけなあかん。仕事は、なんぼ頑張ってもう

まいこといかん（11）

あんさんは嫁はんを貰わんかぎり運が開けん（12）

あかん。このままではあきまへん。感受性だけでは飯は食えん（14）

嫁はんを貰いなはれ。それしか、このいんけつな運勢を変える方法はおまへん（14）

春太はこれらの言葉に落ち込むが、自分の感受性については牽強付会して、「きっと自分の手相には、豊饒な感受性のしるしが、一目瞭然に刻まれていたからに違いない」と、「幸福な気持ちにな」（15）る。このような単純さも、彼の一面である。

その後空腹だった彼は、中華料理屋・太楼軒を訪れ、ワンさん夫婦の激しい夫婦喧嘩に遭遇する。何とか仲裁した春太は、調子に乗って失言してしまい、店を逃げるように出る。帰途、カメラ屋の若主人・森（男色家）と会い、彼から隣の光子とのことを言われ、春太はこのこと彼に近づく。が、不意に抱きしめられ、（それは森に言わせれば、「ふざけてからこうただけ」（224）なのであった。）、慌てて逃げ出す。

病人だらけだ、と彼は思った。どいつもこいつも病人だ。もう十歳若かったら、里見春太は泣いたかもしれない。この世の悪意に。人々の汚濁の心に。自分のよるべなさに。そして、自分のいんけつな運勢に。(26)

春太の心の弱さと、それ故に、他者の悪意に傷ついていることが分かる。しかも、「いんけつな運勢」とあるように、どことなく滑稽感を醸している。

そんな彼のもとに、ワンさんの娘・美鈴が通信添削の申し込みに訪れる。美鈴は将来外交官になろうとして、この春からアメリカン・スクールに進学した、しっかりした娘であった。

春太が夫婦喧嘩の激しさを言うと、美鈴は、「そんなん、しょっちゅうです。お母ちゃん、宙を飛ぶのがうまいですよ。体操の選手みたい」(28)と軽くなす。続いて、「男の人頼って生きて行くしかないような育て方はしとうない」との母親の言葉を紹介して、自分は母にとって継子だと言う。

そやけど、私は、ほんまのお母ちゃんより、いまのお母ちゃんの方が好きですもん」

「なんで……?」「宙を飛ぶのがうまいから」(32)

二人の会話で、春太も美鈴も笑う。美鈴が帰った後、春太は夢見通りを眺めながら、次のように思う。

夢見通りか、と里見春太はつぶやいてみた。夢はどこまでも夢に過ぎないが、美鈴はそれを確固たる望みに転じて、着々と進んでいると思った。夢を望みに変えて進まなければならぬ。これからも、何度も何度も体操の選手みたいに宙を飛んでみせるであろうワンさんの妻女の、マントヒヒそっくりな顔が、その瞬間、ある神々しさを放って里見春太の心に映った。(32)

「マントヒヒ」と「神々しさ」では、イメージにズレがあるが、春太の人の良さと、「夢を望みに変えて進まなければならぬ」という彼の真面目さが分かる。

続いて、シャレードの女主人の甲高い声―「また来てや。一週間もごぶさしたら、承知せえへんでエ」(35)―を聞いて、

彼は、あしたからなんだか元気いっぱいになりそうに気がした。彼は心の中で宙を飛んで来たワンさんの妻女をひよいと受け留めた。夢を望みに変えて進むのだ。(33)

暗い気持ちから、希望―「夢を望みに変えて進むのだ」―へと、彼の心情は変化している。その心情の転回や住民への評価が軽いつても、一人の青年の心情が巧みに描かれている。

#### 四 春太と詩

前節で述べたように、春太の夢は、詩人として一冊の詩集を刊行

することである。だが、彼の詩は他人にあまり評価されていない。例えば、「蒼い島」の「同人のひとりは何のことやらさっぱりわからんと評し、別の女は、幼稚ね、とせせら笑った」(19)とある。そして、彼がめざす詩は、「ここ数年、詩壇の世界でもはやされ、有名な賞を取っている詩人たちの、晦渋で無味乾燥な作品」(10)ではなく、「ひとことも難しい言葉を使わずに、多くのものを埋蔵している」(10)詩である。その目標は正しいのだが、春太自身、自分の詩に「何かが足りない」(20)と思っている。(実際、本文中に引用されている彼の詩は下手なものである。)

何が足りないのか。彼には感受性があるが、それに言葉がつかない。

たとえばどこかのいなかを走る列車の窓から、踏切の遮断機の前でたたずんでいる美しい少女と一瞬目が合ったあとの余韻は、春太の心に夥しい想念をもたらしてくれる。自分でも胸苦しくなるほど、それは彼の内部で膨らみ、いつまでも持続する。けれども、彼がその一瞬に感じたときめきや旅愁や歓喜や寂寥やある種の官能は、書いても書いてもつかまえることが出来ないのだった。(15)

彼は詩人としての「心」はあるが、「ときめきや旅愁や歓喜や寂寥やある種の官能」を、「書いても書いてもつかまえることが出来ない」。つまり、「心」を言葉にできない、表現力が弱いのである。だから、「蒼い島」主権者の川辺洋一は、「思たことを、そのま

ま文章にするのを詩やと考えてたらあかんでエ。それやったら小学生や。里見君の詩は、小学生の詩やでエ」(20)と評する。

しかも、彼が詩作に関して一途だとしても、彼の本質は「優柔不断」であり、「アホと変わらんぐらいのお人好し」(220)である。優柔不断な性格で実行が伴わなければ、夢は頭の中で思うだけであり、お人好しでは物事を単純にしか捉えられない。

たとえ小学生の如き純粹さを保持していたとも、「ときめきや旅愁や歓喜や寂寥やある種の官能」は、小学生にはあまりない。彼は、大人としての感動を言葉にして、詩を造り上げなければならぬ。

## 五 春太と恋愛

春太は30歳の独身だから、恋人がいても不思議はない。彼には「好意を抱いている女性が六人いた。」(24)好意の対象が多すぎるのも問題だが、一番の問題は恋愛に際し、彼が具体的に行動しないことである。

彼が一番好きな女性は、鳥取から上京し、見習い美容師として頑張っている光子であった。光子について、彼は都合のいい、独りよがりの想像をしている。

早く技術を身につけて、故郷で自分の美容院を持ちたいと言っている光子の夫となり、鳥取の海辺の町で、詩作にふける自分の姿を空想してみたりするのだった。(25)

それならば、彼女にどうアプローチをしているかというところ、カメラ店の森によれば、

あその光子と、ときどき窓越しに話をしてるやろ。(中略) 惚れてること、まるわかりやがな。それが、いなかの漬物はうまいですか、とかやなア、ほくもいっぺん光子さんのいなかの海が見たいなアとか、遠廻しに、それもみえみえのセリフで。聞いている俺のほうが恥かしいなってるがな (24)

である。それを聞いて、春太は「羞恥と憤怒で」顔が真っ赤になるが、森の言うとおりで、「まじろっこしいやつちゃんア」である。(似たような例では、春太が光子に海の音が入ったカセットテープを渡した(九章)のは、半年前の光子との会話―「このあいだ、窓越しに話をしたとき、いなかの海の音が懐かしいって言ってたでしよ」(198)―による。ここでは、光子はあきれられるだろう。)

そんな春太のスローテンポさや「地味さ」が災いして、光子も春太に好意は持つが、恋人関係にはならなかった。その点を森に指摘され、直接行動に出るように勧められる。

みっちゃんとふたりきりになったら、下手なセリフは抜きにして、いま俺がしてるみたいに、こうゆっくりと(中略)こうやって、いるうちに、みっちゃん、くにやくになっちゃってしまふんや (26)

いささか卑俗であるが、光子の「二十一歳の肉体は、性への期待や憧れを、ゆるやかな潮の満ち干のように繰り返す」(133)ていた。これは第七章で哲太郎の言う、「あんなふうにして待ってる女に手を出せへんやつはアホやないか。欲しがつてるときに、欲しがつているものをさつと与えるっちゃうのは、大きな愛情や」(161)の考えと近い。対象を性的なものに限るのは問題だが、春太は相手を頭の中で美化し、相手の状況(欲求)が分っていない。いずれにしても、行動に出ない若者には恋愛は成就しない。

その後の春太と光子の恋愛は、光子が竜一に近づくことによって挫折し、光子の帰郷によって終了する。

以上のように見てみると、春太には魅力がないように思えるが、そうではない。彼の一番の良さ(魅力)は、彼の天性の優しさである。

#### 六 春太の優しさ―老女・トミと―

春太の優しさがよく表れているのは、第二章「燕の巣」である。この章は、ひっそりと煙草屋を営んでる老女・トミの遭遇した災難と彼女の死が描かれ、春太はトミの昔話の聞き手であり、死んでいくトミの介護者である。

欲深なパチンコ屋の吉武から、お節介にも店舗の立ち退きを求められたトミは、煙草屋の軒先にある燕の巣に、ひとかたならぬ思いを抱いていた。彼女が煙草屋を開店したとき、ちょうど燕が瓦屋根の下に巣を作った。

その二羽の燕の、巢作りに励んでいるけなげとも、必死とも映る情景に見入って、トミは心の中で思わずつぶやいたものだった。

「ああ、私の店の屋根の下に、燕が巢を作っている。」

彼女はそのとき、たとえささやかではあっても、自分のこれからの人生に、何らかの幸福が訪れそうな確信を抱いたのだった。(39)

そしてそれは、ニューギニアで戦死した息子が、「燕に姿を変えて母のもとに帰って来たような幻想」(40)を、トミに与える。この亡き息子と春太が重なる。

彼女は、里見春太という青年が好きだった。どこか間の抜けたものを、表情や話し方に漂わせてはいるが、その目にはひたむきな情熱と頑固さと負けん気が、ときおり闇の中の犬の眼光みたいにきらつくときがある。それは二十歳で戦死した息子が持つていたものと同じだ。トミは里見春太と言葉を交わすたびに、己のいまは亡き愛しいひとり息子を思い浮かべ、ほんのつかのま、烈しい怒りが、痩せ細った体のあちこちに鳥肌を立てるのをはつきりと感じるのだった。(41)

トミは春太を、「ひたむきな情熱と頑固さと負けん気」の持ち主だと見ている。春太はトミに、飾らない自分を見せていたのだから。二人は親密な仲ではないが、気が合う組み合わせだったと思わ

れる。(そうでなければ、春太の献身的な対応やトミの感謝が理解しにくい。)

そういうトミの煙草屋が、暴力的な高校生たちに敵の店と間違われて、ある日、壊される。トミは心臓(ひどい狭心症)の発作を起こして、救急車で病院に運ばれる。春太は「トミが病院にかつぎ込まれて二十分ほどたつてから息せき切って駆けつけ、そのままトミに付き添」(43)う。これは、春太の不幸な老婆に対する同情の強さ、彼の優しさによるう。

トミは「ひどいショックで一時的な錯乱状態におちい」り、「意味のわからぬひとりごと」が、「ときに涙混じりに、ときに微笑みながら、トミの口から間断なく滑り出」(43)る。それには亡き息子へのものもあった。春太はトミの心情に寄り添い、「この世のありとあらゆるもの、つまり人生そのものに対して憎悪の感情を抱」(44)いた。彼はトミに強く同情したのだから。

その夜、春太は「一睡もせず、トミの横たわるベッドの傍の椅子に腰かけていた」(44)顔を見て挨拶する程度の関係でありながら、ここまでする春太の優しさは本物だろう。

その後、トミを見舞った春太は、イチゴを食べたトミの、汚れた入れ歯を洗ってやり、トミは涙を流して感謝する。彼女の「里見春太という青年への感謝」は「大きく膨れあが」(52)り、「煙草屋の権利と、こつこつ蓄えてきた百十五万四千円の郵便貯金を、自分が死んだら里見春太に譲る」(52)と、必死の思いでしたためる。そして、彼女は自分の生涯が不幸だったと思いがながらも、



けれども、最後の最後に、あんなにも深い感謝の念を抱かせてくれた里見春太に、自分のものをすべて与えることが出来たことは、しあわせでなくて何であろう。しかも、どこかに息子の面影を持つ里見春太に。(53)

と、幸せな気分になる。だが、作品(二章)はハッピーエンドで終わらない。

トミの死後、彼女の「最後の力を振り絞って書かれた遺言」<sup>11</sup>「おかしな形をした紙包み」(54)は、他者によって開かれることなく、そのままトミの棺に入れられ、春太にトミの遺産が渡ることにはなかつた。これは、春太の不運と言うべきか。安藤始氏の言うように、「皮肉」<sup>(6)</sup>とも読み取れる所である。

トミは春太から「しあわせ」を与えられたが、春太はトミから、何を与えられたのだろうか。彼はトミの最後の幸福、自分(春太)が与えた幸福を知らない。彼は、自分の優しさが他者に与える効果を知ることなく、それによる彼の心情的成長は先送りされる。だが、彼の優しさは住民たちの信頼を得て、シリーズ後半(六章や九章)で発揮され、他者を、作品を動かしていく。

以上見てきたように、作品の一章は、グロテクスさを持つ夢見通りの住民たちを紹介し、この世界の特異さを予告し、彼らに関わる春太の内面―弱さ・単純さ・真面目さなど―を描く。そして二章で、死に行くトミとの交流を中心として、春太の優しさ(人間的魅力)を描き、アンダースンの小説世界とは違う、宮本流の作品の始まりを告げる。

(注)

(1) 各章の初出を示すと、次の通りである。掲載雑誌は、いずれも「小説新潮」である。

一章 1983年3月号	二章 1983年8月号	三章 1982年9月号
四章 1983年11月号	五章 1985年2月号	六章 1985年3月号
七章 1985年7月号	八章 1985年8月号	九章 1985年9月号
十章 1985年11月号		

初出の時期を見て分かるのは、一―四章が一つの塊であり、一年以上の空白の後、五章以降が順調に書かれたことである。つまり、アンダースンの影響を受けた三章で、村田親子の異常さがまずは描かれ、続いて、春太やタツミ兄弟が造形され、そして一年間の時間をかけて、宮本輝流の世界へと路線変更が為されたのである。

(2) 『宮本輝全集 第6巻』(新潮社 1992・9)

(3) 本文の引用は、『宮本輝全集 第6巻』(新潮社 1992・9)による。( )内の数字は、ページ数である。

(4) もちろん、それはプラスなものだけではなく、逆の場合もある。例えば、純情と見られていた光子の性欲や故郷への逃走(計算高さ)なども作中に描かれている。しかし、それとて、人間の弱さの範疇であって、「グロテスク」とまでは言えないだろう。

(5) 安藤始「宿命と永遠―宮本輝の物語―」(おうふう 2003・10)による。

(6) 安藤始氏は、「この小説自体が皮肉の上に成り立っている」とする。確かにそうという一面が、シリーズの始まりの章には色濃い。一、二章は見てきたとおりであり、三章の時計屋の親子も四章の肉屋の兄弟も、うまくいかない人生(皮肉)の中にある。

だが、「皮肉」的なものからの脱皮―登場人物たちの真摯さ―が、それ以降の章で、徐々に果たされていく。

〔二〇一六・九・二九 受理〕

コントリビュータ・高田 清 教授(児童教育学科)